

林 玉子

聖隷クリストファー大学 教授

超高齢社会に望まれる生活環境における構築要因、解決手法に関する研究

バリアフリーデザインからユニバーサルデザイン、エコデザインへの進展より

21 世紀に望まれる環境を実現するための条件として以下の知見が得られた。

- ・ 望まれる環境デザインの根幹となすのは、あくまでもバリアフリーデザインであり、バリアフリーデザインは意識づくりを基に考え、真のデザインを追及していくことで、ユニバーサルデザインが実現される。
- ・ 住宅の事例では、始めは「老後に備えた住宅(高齢者住宅)」「ケア付き住宅」「生涯住宅」などの特別な名称で紹介されてきたが、最近は「元気のでる住宅」として紹介されるようになり、この事例を通して、真のバリアフリーデザインを理解してデザインしていけば、自ずとユニバーサルデザインの概念に基づいたユニバーサル住宅へ到達することが示された。グッドデザインを実現するためには、バリアフリーデザインと同じ手法を用いながら、かつ、デザインの概念は、バリアフリーデザインを弾力的・積極的に捉えて、ユニバーサルデザインへと変革する必要があるといえる。心身機能が衰え、体が不自由になったときに備えて、ものや空間、環境に配慮すべき事柄は、何も特別に目立って取り立てるものではなく、日常なにげなく暮らしていき、皆が老いたときに本当に良い家だと思えるグッドデザインの家は、本当の意味での住まいであり、かつユニバーサル住宅の条件を自ずと満たしているといえる。
- ・ 21 世紀において誰もが安心して住み続けられる環境づくりを進めていくには、機能的なハード面だけで対応するのではなく心理、社会的なバリアを取り除くソフト面にも配慮し、また、従来のバリアフリーデザインの条件に、審美性、快適性、価格の妥当性、持続可能性を加えることが必要とされる。
- ・ バリアフリーデザインを根幹としたユニバーサル環境は、公平性、選択可能、住民参加型の考え方を踏まえ、様々な視点から、よりよい社会環境、まちづくりを目指した方向へ、また全人類と自然が共生するサステイナブル環境を包括した方向へと進展していることが明らかになった。地方自治体においてもユニバーサルデザインを主軸においた施策が行われ、どこでも誰でも自由に使いやすいもの・まちづくりが進められている。21 世紀においては、総合的、学際的にアプローチする協力体制を作り、一人の人間として能力を最大限活かし育む社会環境、住民参加型のコミュニティづくり、および自然と共存した持続可能な社会として発展すべきことの重要性が示唆された。